

翻訳（不）可能な「中国」

——『チャイナタウンの女武者』論——*

吉 田 美 津

未だかつて語られたことも、聞き取られたこともないものは、どのように語られ、どのように聞き取られるのだろうか。そのようなものは、言語の枠組みの外にあるので、表象することはほとんど不可能なのだろうか。あえて言語化しようとしても、理性的な理解の外にあるので、それらは意味不明な音や言葉の断片としてしか表現できないのだろうか。その結果、言語化できない新たな沈黙や狂気を限りなく生んでゆくことになるのだろうか。あることを言語化する時、必然的にその周辺に言語化できないものを残余として放逐してゆく。言語化のあとに語りえぬものや、聞きえぬものが生じるのだ。決してその逆ではないだろう。そうであるとすれば、語りえぬものや聞きえぬものこそが、言語化とその合法性を支えているのかも知れない。とすれば、作家の倫理的責務とは何なのだろうか。この小論の目的は、Maxine Hong Kingstonの『チャイナタウンの女武者』¹⁾を以上の点を問題とした作品として読み解くことにある。

1. 文化を翻訳するということ

1976年に出版された『女武者』は、それまで聞き取られることも、そしてあえて語られることもなく、したがって存在しないかのように見なされていたアメリカ合衆国生まれの中国系アメリカ人二世についての創作的自伝である²⁾。『女武者』は今日に至るまで多文化主義を標榜する大学のカリキュラムにおいて、特にアメリカ研究、人類学、エスニック研究、女性学研究などの授業で最も多く取り上げられてきたテキストである。『女武者』はアメリカ文学研究に

においてひとつの「正典」(cannon)となりつつあると言ってよい (Wong, 1999, 2-3)³⁾

したがって、『女武者』をめぐるこれまでの批評は、多文化主義を掲げるアメリカ合衆国社会を背景に作品におけるマイノリティ⁴⁾のエンパワメントに着目していた。これらの批評の要は、マイノリティへの差別と抑圧によって沈黙を強いられていた主人公が彼女の言葉を獲得してゆく様を描いたものだという理解に収斂される。この見方は、沈黙とは社会システムの不正によってマイノリティに押し付けられた抑圧の一形態であり、それゆえにその不正と戦い、それを正すことによってマイノリティを「正しく正当な」発話に導くことができるという合理的な主張に貫かれている。たとえば King-Kok Cheung は、Kingston が「彼女の先祖の過去をアメリカ合衆国の現在に合うように再構築したばかりでなく、中国人でも白人アメリカ人でもない中国系アメリカ人のアイデンティティを主張したのだ」(1988, 109)と論じる。言うなれば、Kingston は「彼女のエスニックな出自が生み出した言葉 (native dialects) を語り直す (transplant) ことに成功した」(162)と云うのである。Cheung の考える Kingston の成功とは、中国系アメリカ人の過去と現在を他のアメリカ人にも理解可能な物語として提示できたということである。つまり、『女武者』は、一種の文化翻訳の実践についての成功例であると言うのだ。

しかし、Cheung の説をよく考えれば、文化翻訳とはあたかも統一体としての異なる二つの文化 (中国とアメリカ合衆国の文化) が実体として存在すると前提しなければ不可能な説であることが分かる。ひとつの文化 (言葉) を他の文化 (言葉) へと翻訳しようと概念化した時、すでに二つの文化 (言葉) にある翻訳可能なものとそうでないものの存在を仮想しているということである⁵⁾。翻訳者が翻訳可能なものとそうでないものを選択する時、翻訳ができないと考えたものが二つの文化の差異として、それぞれに異なる文化統一体というものがあるという幻想を作り出すのではないだろうか。もともと異なる二つの文化があるのではなく、翻訳という行為を通じて「異なる文化」が仮想され、形成

されるのではないだろうか。

『女武者』を文化翻訳という観点から論じる研究に以上の視点が欠落している。たとえば、Martha J. Cutter は、『女武者』には「中国文化をアメリカ合衆国の現実に合うようにうまく翻訳できない者は、狂気や死に至る」(599) という事が描かれているとし、「翻訳の象徴的な意味あいとは比喩であり、一世と二世の世代間の結合なのだ」(606) と述べる。Cutter は、アメリカ化した二世の助けのもと一世はアメリカ合衆国文化に学ぶ姿勢があるならば、悲劇的な結末は避けられるであろうと暗示している。「文化的調和」をもたらす翻訳という Cutter の主張は、翻訳という行為そのものが、翻訳不可能なものを常に呼び出す行為であり、異なる二つの文化という前提を提供しつづけるのだという視点が欠落している。Cutter にはマジョリティが常に翻訳可能なものとそうでないものを差異化するのだという認識がない。

2. 伝達の失敗

『女武者』には中国文化（中国語）からアメリカ合衆国文化（英語）へとうまく翻訳できない事柄やどのように命名してよいか分からないものに満ち溢れている。その意味で、『女武者』を「正しい」文化翻訳の実例であると捉えるよりも、むしろ伝達の難しさ、あるいはその失敗の例として捉えることの方が重要である。そう捉えることによってこのテキストが文化を異にする多様な読者を想定していること、したがって『女武者』が発するメッセージには異種混交性のあることが分かるのである。『女武者』の分析に入る前に、伝達の失敗はこのテキストの受容史そのものの問題であったことを先ず示したい。

『女武者』は、出版当時批評家から誤読に満ちた賞賛と、中国系コミュニティからは激しい反発を同時に受けることとなった。このことは、Kingston が文化的背景を異にする大多数の人々と、文化的背景を同じにする少数の中国系の人々を共に読者としているということである。『女武者』をめぐる言説は、アメリカ合衆国における中国に関する言説についての David Leiwei Li の研究に

従うならば、それぞれ二つの言説のタイプに分類できる。ひとつは、サイードが『オリエンタリズム』で明らかにした西洋的主体形成を支える他者としてのアジア（人）の構築を目論む“American Orientalist discourse”であり、一方は中国系移民社会でのみ流通した“Chinese American discourse”（1992, 320）である。それらは互いに支配と抵抗という文体を維持しつつ、互いに交わることなく存在してきた。『女武者』は、前者からは「オリエンタル」な書物として受容され、後者からは中国への反逆として非難をあびた。

誤読による賞賛と身内からの反発は、互いに異なるように見えて実は、西洋と東洋という二項対立において『女武者』を捉えようとしている点は同じであり、この意味で互いが互いの合わせ鏡となっている。“American Orientalist discourse”に属する批評家は、『女武者』がいかにかに東洋的であるかを述べて、それを賞賛する。Kingstonは、“Cultural Mis-readings by American Reviewers”でオリエンタリズムを払拭できない批評を例示する。それらは、『女武者』を“foreign”で“oriental”なテキストと定義することによって彼らの属する主流文化を透明で自明なものとしている。

Mythic forces flood the book. Echoes of the Old Testament, fairy tales, *the Golden Bough* are here, but they have their own strange and brooding atmosphere inscrutably foreign, oriental. Margaret Manning in *The Boston Globe*.

No other people have remained so mysterious to Westerners as the inscrutable Chinese. Even the world China brings to mind ancient rituals, exotic teas, superstitions, silks and fire-breathing dragons. Barbara Burdick in *the Peninsula Herald*. (95-6)

Kingstonはアメリカ人であるにもかかわらず、中国人による書物だと誤解する批評家もいる。“Subtle, delicate yet sturdy, it (*The Woman Warrior*) is ineffably

Chinese.” (97) さらに、『女武者』に中国の儒教の精神に対する反発があることを嘆く批評もある。

She rebels against the strict pattern of life inherited from old China and based on Confucius' moral teachings, which preserves the strength of the family's heritage, and which are the basis of Chinese ethics and virtues. (97)

これらの批評家には西洋と東洋という幻想の理念的統一体が相互依存的に存在しているという視点がない。

中国系コミュニティからの反発も、西洋の眼差しの下に捉えられる中国系を内面化した結果である。中国系教員組合からの批判はそのひとつである。

It must be pointed out that this book is a very personal statement, and is a subjective exposition of one person's reactions to her family background. It would be dangerous to infer that this “unfamiliar world” represents or typifies that of most Chinese Americans. *The Woman Warrior* is not an easy book to grasp, both in terms of style or content. Especially for students unfamiliar with the Chinese background, it could give an overly negative impression of the Chinese American experience. (101)

“most Chinese American” のものとして一般化する生活スタイルがあるのだろうか。また、作家はそのような典型的な中国系の生活がもしあるとすれば、それを描くべきなのだろうか。中国系を固定したエスニック集団と捉える中国系内部からの批判は、前述の “American Orientalist discourse” の対極にあるように見えて、逆にそれを支持する言説となってしまっている。

『女武者』はさらに中国系作家の間でのジェンダー問題を顕わにした。中国系男性作家 Frank Chin は、Kingston や『ジョイ・ラック・クラブ』の Amy Tan,

さらに『M. バタフライ』を書いた David Henry Hwang を標的にし、彼らの作品は白人の主流文化に迎合するものであり、アジア系アメリカ文化の「女性化」を示すものだとして強く批判した。「キングストンやホアンは白人の自己イメージの病んだ部分はすべて中国的なものだという白人のファンタジーを強めている。これは彼らの白人エゴへのサービスである。…中国系アメリカ文化や歴史についての彼らの見方の源は、白人の持つファンタジーをもとにしており、中国系アメリカ人の歴史から見ているのではない」(28)。Chin は1973年アジア系アメリカ文学の初めてのアンソロジー *Aiiiiiiii!* を編集した。そこで彼はアジア系の文学は『三国志』や『水滸伝』、『忠臣蔵』といった中国や日本の古典文学に登場する英雄の精神を学ぶべきだと説いた (*Aiiiiiiii!* xxxvi-xxxviii)。そうすることによってアメリカにおけるアジア系の「英雄の伝統」を回復すべきだと主張した。Chin の主張はアジア系文学の男性性優位を唱えるものであり、さらにアンソロジーには中国系、日系、そしてフィリピン系といった旧移民の作品が中心であり、新しい移民や女性の作品が少ない事実は、アジア系の多様性を視野に入れていこうという意図がないことが分かる。この一種の文化運動は「文化ナショナリズム」と言われている。Chin は『女武者』のパロディとして広東のフランス人街の洗濯屋であるフランス系中国人 Smith Mei-jing が書いたとする “Unmanly Warrior” を書き、『女武者』を揶揄した。Chin によれば、Kingston は中国の父権性による女性差別を不当に誇張し、その歴史と文学を歪曲し、中国を西洋より遅れた世界として描いている点が許しがたいものであった。

Chin のアジア系男性性を鼓舞しようとした主張の背景には、アメリカ合衆国においてアジア系男性が歴史的にも社会的にも常に彼らの男性性を脅かされてきた状況があったことがあげられる。アメリカ合衆国に移民として渡った中国人は、1880年カルフォルニア州の「異人種間婚姻禁止法」の対象となり、彼らには異人種との結婚は禁止された。さらに1882年の「中国人移民禁止法」により男女の比率の不均衡はさらに深刻となった。1852年カルフォルニアで

は中国人男性 1,179 人中女性は 7 人であったという (Takaki 121)。儒教的家父長制の伝統のなかで育ちながら大半の男性は一生を独身で過ごし、少数の中国人女性の大半は売春婦であった。中国系移民は低賃金で働くため収入のいい職から締め出され、コックや洗濯屋という「女性の仕事」に従事せざるを得なかった。

Chin も言うように、アジア系男性はアフリカ系、先住民、そしてメキシコ系と比べると「女性的」なイメージを付与されてきた。Chin は「アジア系のステレオタイプはほとんど男性性を欠いているという点で特徴的である。われわれの気高さとはせいぜいが有能な家政婦のものにすぎない。」(Cheung, 1999, 16-17) と言う。このような歴史的社会的背景が Chin の『女武者』の批判となっていることが分かる。

しかし、Chin が本当にとりくまねばならない問題は、アジア系男性の男性性の否定は一方で、アジア系女性の過度のセクシュアルな表現と表裏一体であるという人種差別構造である。『男性性の欠如した』中国系男性の表象が中国系にとって屈辱的であるならば、「過度にセクシュアルな」中国系女性の表象も同様に差別的である。このような歪められたエスニックなステレオタイプが東洋に付与される内実である。『女武者』は、このような固定したステレオタイプを打破しようとしている点を次に検討したい。

3. メッセージの雑種性

『女武者』に登場する言葉を持たぬ者や沈黙する者に注目することは、このテキストを成功した「文化翻訳」と解釈する Cheung と Cutter への反論の糸口となる。『女武者』は母親英蘭が娘である語り手に話した物語を語り手が語り直すというテキストである。したがって、母親の話にでてくる者たちは母親の言葉を介して語られる者たちであり、彼らは中国にいた者たちである。語り手は物語の最初に、中国系アメリカ人二世である自分にとって自分のなかの何が中国的であり、何がアメリカ的なものを明確にすることは可能なのだろうか

と自問自答する。

Chinese-Americans, when you try to understand what things in you are Chinese, how do you separate what is peculiar to childhood, to poverty, insanities, one family, your mother who marked your growing with stories, from what is Chinese? What is Chinese tradition and what is the movies?

(5-6)

語り手にとって映画からの影響も含めて、明確に定義ができるわけではないが、かと言って存在しないわけでもない、日常的に自分に影響を与え、意識せざるを得ないようなもの、それを語り手は「中国的なもの」と言っている。言うなれば、母親が娘に語り聞かせたものたち、つまり母親の言葉から知ることはできたが、その声を直に聞くことのできない過去に生きた者たち、今は言葉を失っている者たち、その者たちこそが、語り手にとっての「中国的なもの」ではないだろうか。

さらに、語り手が真の「中国の伝統」と「映画でみた中国」との違いにこだわるのは、前述した中国をめぐる二つの言説——“American Orientalist discourse” / “Chinese American discourse”——が「中国」とは何かを長い間表象し続けてきたと言うことがある。語り手の問いは、二つの言説を成立させている構造の虚妄性そのものをついている。中国系二世にとって「中国の伝統と映画の区別とは何なのだろうか」と問うことによって、翻訳され脚色された「中国」はもはや真の「中国」ではないと言えるのだろうかと問い返している。この問いかけは『女武者』全体の構造であるところの、語り手が母親から聞いた話しを語り手自身の言葉で翻訳し、そして再現することと深く関連している。なぜなら中国系二世にとって「中国」とは、物語として永遠に語り直される事を意味している。つまり「中国的なるもの」は様々な雑種化した翻訳を通じて仮想され続けるものなのだ。

そのことを示しているのが、語り手が言葉を持たぬ者や沈黙する者に「声」を与えようとして躊躇し、時に彼らの代わりに語る自分の「声」の横暴さを恥じ、彼らをめぐる「声」が複数あることを暗示する時である。たとえば、自殺した伯母について語る時、語り手は自身が自明としている西洋社会のフェミニズムの視点で伯母の死を理解する限界を意識している。五つの話からなる『女武者』の最初の「名のない女」は、母親から“You mustn't tell to anybody.” (3) と言われた父親の妹、語り手にとっては伯母にあたる女性についての話である。伯母は結婚した夫が結婚後すぐアメリカ合衆国に出稼ぎに行き、そのあとやがて父親の分からない子どもを孕んだ。伯母の不貞を罰するために村人たちは伯母の家族の住む家屋を壊し、家畜を殺した。そして伯母は赤子と共に井戸に身を投げる。そのことによって父親の家族のあいだで伯母に言及することはタブーであり、伯母は忘却された存在となっている。

そこで、語り手は名も与えられていない伯母の短い人生を再現 (翻訳) しようとする。“Unless I see her life branching into mine, she gives me no ancestral help.” (8) 伯母が自律した内面世界を持っていたのだと考えたい語り手は、祖母を自分の“forerunner” (8) と捉え、個人主義を認めない中国社会の狭量さを指摘する。“The villagers punished her for acting as if she could have a private life.” (13) 粗野な男から無理強いされたとしても、あるいは秘められた恋であったとしても伯母が、相手の名を明かさなかったことがそれを物語るのではないかと。

一方で、語り手は自分の想像が真実でないかも知れないという思いがある。とすれば、伯母についてこうして語ることは「告げ口」したことになり、彼女の反感をかったかも知れないと思う。“I am telling on her, and she was a spite suicide, drowning herself in the drinking water.” (16) なぜなら伯母に家や服を形どった“origami”を供えるのではなく (中国の風習に従って)、その紙に彼女の事を書き記しているのです、彼女の“ghost”が語り手に引きつけられて来るからだと言う。“My aunt haunts me —— her ghost drawn to me.” (16) 伯母を

沈黙のかなたよりたぐり寄せて来ることは、彼女に言葉を与えることかも知れないが、逆に彼女の真実を裏切ることかも知れない。沈黙を言葉によって押し広げようとする時、語り手は言葉を持たない当事者が“ghost”となって彼女に何度も語り直しを要求してくることに耐えねばならない。

この言葉を持たない、沈黙する者の“ghost”とは何なのだろうか。語り手の母親英蘭について書かれた「シャーマン」は、「名のない女」の伯母の“ghost”のような様々な幽霊や怪物に満ち溢れた話である。それは、中国で医学を修めて、医者になった母親の一種の「鬼退治」の話となっている。登場する“ghosts”は無害なものもいれば、禍をもたらすものもある。英蘭の「鬼退治」は英蘭の視点から解釈されてきた。たとえば英蘭は娘のための「モデル」として勇気や知識そして力強さを象徴している (VanSpanckeren 48)。あるいは英蘭と“ghosts”との戦いは中国で二人の子どもを亡くした悲しみに打ち勝ち、アメリカ合衆国にいる夫との新たな絆を再認識する英蘭の逞しさを示すと (Chua 147)。しかし、英蘭と“ghosts”は、そのように異なるものだろうか。

理性的で、現実的な (“practical” 66) 英蘭は、不可解で謎に満ちた “ghosts” と合わせ鏡のように存在しているのではないだろうか。語り手が母親英蘭から学ぶのはこの事ではないだろうか¹⁰⁾ 英蘭はなにくわぬ顔で最後に言う。“Of course. There are no such things as ghosts.” (70) 何が “ghosts” かは見る者の視点による。「シャーマン」に登場する夥しい “ghosts” は、われわれがひとつだと考える現実が複数あることを暗示する。英蘭は、“the ape-man”や“Tigerman”を見たと言う。語り手は、彼らはたぶん北方民族であったであろうと解説する。さらに英蘭は父親の第三夫人が黒人の女性であったと言う。彼女は連れてこられた時は、だれにも分からない言葉でしゃべり続けていたが、やがて何もしゃべらなくなったと言う (85)。その女性にとって英蘭の家族が “ghosts” であったであろう。中国古代の神話世界を描いた『山海経』の冒頭にこう記されている。

世にいう異常も、それが異常であるといいきれないし、世にいう異常でないことも、それが異常でないといいきれない。なぜなら、物それ自体からみれば異常なのではなく、我身を立てて後に異常となるのであって、異常はまこと我にあって、物それ自体が異常なのではない。(9-10)

異常なもの—“ghost”—は、主観—「我身」—をもって初めてうまれると言う。夥しい“ghost”の登場は、『女武者』の世界そのものを常に相対化する効果を持つ。“ghost”は読者が自明としている先入観や社会性とは何かを問うてくる。語り手にとってアメリカ合衆国社会もまた“ghost”の充満した社会だった。

America has been full of machines and ghosts-Taxi Ghosts, Bus Ghosts, Police Ghosts, Fire Ghosts, Meter Reader Ghosts, Tree Trimming Ghosts, Five-and-Dime Ghosts. Once upon a time the world was so thick with ghosts, I could hardly breathe; I could hardly walk, limping my way around the White Ghosts and their cars. There were Black Ghosts too, but they were open eyed and full of laughter, more distinct than White Ghosts. (97)

職業別の“ghost”は、職業を人種別に区分けして見る視点を相対化し、黒人の「黒」を目立つ色として言及することで、白人と黒人の間にある社会的あるいは人種的ハエラルキーを逆転させている。“yellow”である語り手の視点には、“yellow”は見えていない盲点もこの描写はついている。

「鬼退治」の話を鬼の側からの話も志向しながら語ること、比喩的に言えばKingstonが目論んでいることはこのことではないだろうか。発話することと沈黙すること、あるいは語る者と語られる者の奇妙な相互依存的なねじれを語り手は、幼いころ中国系の女の子をいじめた体験を通じて語っている。語り手は、幼稚園での3年間を一言も英語をしゃべらずに過ごし、さらに黒を塗りつ

ぶした絵しか描かなかったため、「低能児」とされ問題視された。やがて小学校に入り、ようやく英語をしゃべるようになったが、クラスにかつて語り手のように一言もしゃべらない中国系の女の子がいた。語り手は、彼女に嫌悪感を感じ、何か言わせようと必死になる。強要すればするほど、口を閉ざす少女に語り手は次のように言う。

“You’re disgusting,” I told her... “...You’re such a nothing.” (178)

“Why won’t you talk?” I started to cry. “...And you, you are a plant... That’s all you are if you don’t talk. If you don’t talk, you can’t have a personality. You’ll have no personality and no hair...” (180)

言葉を持たないこと、語らないことは“nothing”であり、“personality”を持たないことなのだろうか。沈黙を負の所為であると判断するのは、ひとつの合理的な言語システムの視点から見るとそう仮定できるということだけではないのか。中国人少女は語り手に髪の毛を引っ張られても、頬をつねられても一言も言わず、いつしか二人とも泣いていたのだった。“Her sobs and my sobs were bouncing wildly off the tile, sometimes together, sometimes alternating.” (181) この事件のあと語り手は原因不明の病で18ヶ月間家で療養することになる。

少女と語り手は、発話する者と沈黙する者として対決したのではなく、中国からの移民の子どもはなぜ子供時代に言葉に関する主体の葛藤と分裂を内面化しなければならないのだろうかという現実への異議申し立てを（泣き）声として共鳴させたのだ。中国系二世は他人には奇妙に響く中国語を自分のなかに抑圧し、英語を“personality”の装いとして身に付けねばならない。このエピソードは、中国系二世は発話する者であり同時に聞く者であり、また沈黙する者であるということを教える。過去の沈黙に耳を傾けつつ、翻訳の不可能性に沈黙し、そして同時に言葉にならないものを言語化しようとする。語り手と少女は、中国とアメリカ合衆国のはざまにある中国系二世の分裂した主体を象徴し

ており、発話の主体となった自己は常に聞く主体と沈黙する主体からある種の検閲を受けることを意味しているのではないだろうか。。つまり、自分のなかで複数の異なる主体が絶え間のない接触を持つということである。18ヶ月の療養生活は、象徴的にこのように不断に引き裂かれた主体を引き受けるのに要する時間だったのではないだろうか。

4. 他者との共在性を求めて

Kingston は、語ること、あるいは命名することが、語るができないものや未だに名を与えられていないものという、さらにマイナーなものへの可視化への道程であることに敏感であった。それらはこの世のものではない“ghost”となって語り手に執りつき、彼らの物語の不断の語り直しを要求する。それは語り手の中にある発話する主体、沈黙する主体さらに聞く主体という複数の主体の絶え間ない接触において創造される語りの手法となっている。

「名のない女」の伯母について語ることで、さらに深い伯母の沈黙を炙り出したように、「西の宮殿で」で語られる母親の妹、月蘭の狂気も同様である。月蘭は、30年ぶりに香港から夫に会いにきた。内気な月蘭は英蘭に励まされ夫と再会するが、優秀な外科医となった夫には家族もあり拒絶される。月蘭は次第に正気を失い精神病院に入る。表面的には、異文化に馴染めないことが老境にあった月蘭の狂気を引き起こしたと読める物語である。しかし、月蘭の言葉から読み取れるのは、アメリカ合衆国社会こそが彼女にとって異界なのである。彼女にとって合衆国社会は“the barbarians”の社会であり、姉の子ども達は“the sweet wild animals” (134) のように見える。月蘭が中国から来た“the ghost” のようであったのは、彼女が自分の物語を語るのではなく、語り手によって再現 (翻訳) される存在であるからだ。月蘭がアメリカ合衆国の人々に対してなぜ30年の間夫と離れていたかについて理解されうる整合性のある話を語ることは難しい。月蘭の狂気を翻訳が前提としている等価性において言語化することはほとんど不可能である。それゆえ月蘭の物語は、様々な視点によっ

て常に新しく語り直されることが要請される。このように語り手にとって“ghost”について語る唯一可能な語りの形態とは、それまで語られてきた話を女武者として果敢に語り直すことである。

この意味において Kingston が、中国の伝承物語「木蘭の歌」と実在した女性詩人蔡琰の漢詩「蘆笛の歌」を語り直した「白虎」と「野蛮人の蘆笛の歌」は「中国的なるもの」の変容を如実に示している。さらに「白虎」と「野蛮人の蘆笛の歌」を比べると、前者はマイナーな他者の可視化を促し、後者においては他者との共在性とは何かを問うている。

「白虎」に語り直された「木蘭の歌」は、北朝時代に成立したとされる中国の伝承物語である。それは、成人した息子のいない父に代わって娘の木蘭が男装して君主に仕え、手柄をたてたため君主に留まるようように請われるが、それを断って親の元に帰ると言う話である¹¹⁾

わが陣羽織を脱ぎすてて
 もとの衣装を身につける
 …
 門を出て戦友たちを見かけると
 戦友はみな驚きあわてる
 「長い間いっしょにいたが
 木蘭が女だとは知らなんだ」(371)

一方「白虎」は、「木蘭の歌」の女武者の武勇伝を元にした語り手自身の空想の武勇伝である。それは、語り手が長く厳しい修業ののち家族と村人を苦しめた男爵を退治し、北京に攻め入り皇帝を倒し、のちに子どもと夫の待つ村に帰ると言う話になっている。古典では木蘭は独身であり、子どももいない¹²⁾ Kingston の脚色について Wong は、語り手の“Chinese American reality” (1991, 28) を表現するための語り直しであると理解する。男性と同等の忠誠

心と行動力を持つ語り手は、虐げられた漢民族のために戦うという新しい役割を与えられている。中国系二世の語り手について考えるなら、これはフェミニズムとコミュニティへの忠誠が融合された語りなのである (29)。

しかし、「白虎」にしばしば言及される「漢民族としての誇り」をどのように理解すべきなのだろうか。語り手の家族と村人への忠誠とあだ討ちの要となっているのが、この漢民族の卓越さなのである。“You can be remembered by the Han people for your dutifulness.” (23) 語り手が女武者として戦った敵は、明確にはされていないが、中国の少数民族や異民族、特に北方の匈奴であろう。邪悪な「他者」とされた敵は、“giant” (37) であり、“genie” (41) のいでたちをしている。「木蘭の歌」を中国の「武俠小説」の語りをうけて語り直すことによって Kingston は、中国系アメリカ人の中にあるある種の「中華思想」を相対化しようとしているのではないだろうか。漢民族の卓越さを言うのであれば、それは虐げられた人や差別されている女性など、言葉を持たないものや名も与えられない人々を救うような思想のもとでこそ可能であろうと言うことを。皇帝を討った後語り手は、纏足の女たちの一群が閉じ込められているのを発見する。ひとりでは歩けない女たちである。“These women would not be good for anything.” (44) 引き取り手もない女たちは、のちに黒と紅の服に身に包んだ傭兵軍団になったという話である。“Later, it would be said, they turned into the band of swordswomen who were a mercenary army.” (44) 漢民族の誇りに支えられた女武者の武勇伝は、漢民族の中でさらに差別されている者たちを可視化しようとする。

さらに、女武者の空想の武勇伝は、漢民族の中でもっとも可視化されることのないアメリカ合衆国に住む中国系二世にこそ必要な物語なのである。語り手は、“My American life has been such a disappointment.” (45) と言う。アメリカ合衆国では、戦いも殺し合いも薄汚れたものであり、武術も自信のない少年の護身術と化している。語り手には様々な屈辱と悩みがある。人種差別的な雇い主から解雇されたが、その仇をどうするのか。政府に取り上げられたサンフラ

ンシスコとニューヨークの家族の洗濯屋をどうやって取り戻すのか。「木蘭の歌」の木蘭は、このような語り手に彼女の体験を物語る糸口を与え、未だかつて語られたこともない中国系二世の体験に形を付与する。

漢民族のなかのさらにマイナーな者たちについて語ろうとした「白虎」に対して、蔡琰の「蘆笛の歌」を語り直した「野蛮人の蘆笛の歌」では、野蛮人や匈奴といった他者との共在性を生み出そうとする意図がみえる。詩人蔡琰は177年に生まれ、若くして夫を亡くし195年ごろ蛮族であった匈奴に捉えられ、生活を共にして二人の子どもをもうけた。12年後再び中国・漢の国に連れ戻された蔡琰は、このことを歌にした。それが「蘆笛の歌」であると言われている。

Kingston は、匈奴と共にえびすの地に暮らした蔡琰とアメリカ合衆国にいる中国系二世の語り手を重ね合わせる。そのために Kingston は、Wong も言うように (1991, 32-34)、原作について二つの点を変更している。Kingston はひとつには、原作にある漢の国への蔡琰の強い望郷の念には言及していない。二つ目には原作にある、子どもと別れることへの悲しみは描かれていない。原作は、えびすの地から戻った蔡琰が歌う歌であり、彼女は漢の国に帰ることができた喜びと子どもとの別れのつらさの二つの思いに引き裂かれている。

蘆笛の十五のふしは しらべも迫る
 胸につまったこの気持ちを 読みとる人はいないのか
 異境にあって 異俗にまじり
 帰ることのみ 神だのみをし
 祖国に帰れさえすれば それで満足と思ったが
 ...
 子と母は別れ別れて たえられぬこの思い
 ... (39)

一方、「野蛮人の蘆笛の歌」で強調されている点は、異郷の地にある蔡琰が匈奴の蘆笛を聞き、強く心を動かされ彼らの蘆笛に合わせてそれまでの苦しみや悲しみを歌ったと語り直されている点である。母親の歌う言葉とその意味も分からぬ子どもも母と共に歌い、蔡琰の声と匈奴の吹く蘆笛の音が草原にろうろうと響きわたったという。その時、匈奴も蔡琰の思いをよく理解したと言う。

Her words seemed to be Chinese, but the barbarians understood their sadness and anger. Sometimes they thought they could catch barbarian phrases about forever wandering. Her children did not laugh, but eventually sang along when she left her tent to sit by the winter campfires, ringed by barbarians. (209)

原作の「蘆笛の歌」で蔡琰が個人的な苦しみや悲しみを歌っているのに対して、Kingstonの語り手は異民族の中にある蔡琰が歌った歌が彼らの心を打ち、彼らの蘆笛とうまく合い美しい音色になったと語り直している。Kingstonの蔡琰の歌は、異なる文化をも横断してゆく力を持っている。¹³⁾「白虎」の女武者も歌ったが、それは軍を鼓舞する(“inspired” 37)するために歌ったのであり、他者と共に歌ったのではなかった。語り手は中国の歌と匈奴の楽器が醸しだす新しい音楽に他者との共在の可能性を見ている。そして語り手は歌と楽器の融和を “It translated well.” (209) と表現する。『女武者』の最後となるこの言葉は、「中国的なるもの」を翻訳する責務を負った Kingston の彼女自身への言葉であったかも知れない。

結 び

『女武者』は、翻訳が前提としている共訳の透明性を追求することがいかに不可能であるかを明らかにしている。それは翻訳を介して仮想される異なる二つの文化の統一体こそが翻訳の可能性を支えていること、そしてこの実体のな

い差異化——「中国的なるもの」や「アメリカ的なるもの」——は、翻訳の失敗や伝達の失敗においてのみその虚構性を露呈することを示唆している。Kingstonにとって翻訳とは、未だ語られたことも、聞かれたこともないものを命名する行為に等しい。アメリカ合衆国生まれの二世は、移民一世から“Ho Chi Kuei”と呼ばれる。この言葉の意味の分からない語り手は、辞書を引く。“Kuei”は“ghost”という意味である。辞書によると“Ho”“Chi”は、「ムカデ」,「地虫」,「鯉」,「なつめの木」等とある。語り手は,“Oh, is that all?” (205)と落胆する。辞書の定義は、移民一世が時には愛情を込めて、時には叱り付けるように言う“Ho Chi Kuei”の説明にはなっていない。語り手自身が,“Ho Chi Kuei”に新たな意味を与えて言語化するしかない。翻訳は雑種化したメッセージとなる。

Kingstonは、『女武者』について“I am an American writer, who, like other American writers, wants to write the great American novel. *The Woman Warrior* is an American book. Yet many reviewers do not see the American-ness, nor the fact of my own American-ness.” (1998, 97)と云う。Kingstonは、彼女の中の語る主体、沈黙する主体そして聞く主体という複数の主体の接触により彼女の言う“American-ness”が絶え間のない語り直しを要請してくることを引き受けるのである。それは彼女の中の“Chinese-ness”の語り直しでもあるだろう。(2002/5/20)

*本論文は2001年6月17日愛媛大学で催された中・四国アメリカ文学会第30回大会でのシンポジウム「多民族社会アメリカの文学と文化表象」で司会兼発題者として発表したものに加筆訂正を加えたものである。

註

- 1) 『チャイナタウンの女武者』は四つの話“No Name Woman,” “White Tiger,” “At the Western Palace,” “A Song for a Barbarian Reed Pipe”からなる。今後『女武者』と記す。日本語訳『チャイナタウンの女武者』も参考にした。

- 2) 『女武者』の自伝論争については Sau-ling Cynthia Wong, Marilyn Yalom, Joan Lidoff を参照。議論の論点は、自伝は創作なのか「真実」の語りなのかという点である。このような議論は、エスニック文学の自伝が作家個人の創作であると同時に作家の属するエスニック・コミュニティの代弁とみなされる現状を示している。
- 3) 『女武者』の大学での使用度の高さは、おのずと Kingston 作品の出版と増刷を促し、それに比例し Kingston を教えることのできるアジア系アメリカ文学専攻の教員の必要性が高くなる。結果として Kingston が多くの博士論文のテーマとなり、同時に研究者は毎年 Kingston に関する論文や研究書を執筆し発表する。Critical Companions to Popular Contemporary Writers として出版された *Maxine Hong Kingston: A Critical Companion* (2001) は、高校で Kingston を教えることができるように編集された入門書である。
- 4) ここでいうマイノリティとは、マジョリティとの関係において常にマイノリティであるのではなく「マイノリティになる」という流動的な変化において捉えられる状態を重視している。Spivak 191; ドゥルーズ=ガタリ 125-26。
- 5) 酒井直樹は翻訳について「厳密に言うと、一つのテキストを別のテキストに翻訳あるいは通訳しなければならないのは、二つの異なった言語の統一体があらかじめあるからではなく、…翻訳の表象を通じて、あたかも翻訳する言語とされる言語の自立的で閉じられた統一体が存在するかのようになり、それらの言語を措定することができるような制度が成立することになるからなのである。」(4) と述べる。
- 6) 中国移民の主な「声」は、*Island: Poetry and History of Chinese Immigrants on Angel Island, 1910-1940*。
- 7) King-Kog Cheung は、中国における「男らしさ」がアメリカ合衆国のそれとは異なる点をあげ、フェミニズムとの共存は可能であると論じる (1991, 125-26)。
- 8) Robert Lee はアジア系移民を “the third sex” と捉え、20 世紀初頭アジア系男性の家政婦がアメリカ合衆国の家族秩序の鍵を握っていたと論じる (83-105)。
- 9) David Leiwei Li は、1924 年、1882 年の排斥法で中国人の妻の入国が制限されたことが背景にあると指摘する (1998, 61)。
- 10) Gayle K. Fujita Sato は、多義的な “ghosthood” (語り手にとっての中国) が語り手によって彼女の語りの源泉になっていることを指摘している (141-142)。
- 11) 「木蘭の歌」を脚色したディズニー映画『ムーラン』(1998) は、「エキゾチック」なものがどのようにメディアで作られていくかをよく示している。映画の最後に流される、スティービー・ワンダーとポップ・ミュージック・グループ 98 degrees の歌と映像は、チャイナタウンを背景に美しいアジア系女性に対して「したいことをしろ」「ほしいものを取れ」と歌いかけることによって文化的差異や人種差別をやすやすと超えられるという幻想を与えている。中国系男性は背後の竜の使い手としてだけ映像に現れる。Sheng-Mei Ma は、映画『ムーラン』について「エスニック」なものを取り入れながら物語を脱人種化し、若者向けの成長物語に脚色していると論じる (126-43)。

- 12) Sau-ling Cynthia Wong は、「白虎」に付加されたものは、①15年に及ぶ修業時代、②女武者の背中に父親が一族の怨念と名前を刺青したという話、それは実在の武将 Ngak Fei (Yur Fei) の逸話を利用したこと、③木蘭は一族の復讐のために権力者を倒し、さらに異民族の皇帝を討ち、その後夫の元に戻り忠実な嫁として義理の両親に仕えたことをあげている (1991, 28-32)。
- 13) Wong は、Kingston の蔡琰が個人的な癒しだけでなく言語的文化的障害を克服する翻訳の可能性を目指していると論じる (1991, 35)。

Works Cited

- Cheung, King-Kok. "The Woman Warrior versus The Chinaman Pacific: Must a Chinese American Critic Choose between Feminism and heroism?" *Maxine Hong Kingston's The Woman Warrior: A Casebook*, ed. Sau-ling Cynthia Wong. New York: Oxford UP, 1999 (1990). 113-33.
- . "Don't Tell: Imposed Silences in *The Color Purple* and *The Woman Warrior*." *PMLA* 103.2 (1988): 162-74.
- Chin, Frank. "The Most Popular Book in China." *Maxine Hong Kingston's The Woman Warrior: A Casebook*. 23-28.
- Chin, Frank, et al., eds. *Aiiieeee! An Anthology of Asian-American Writers*. New York: Mentor, 1991 (1974).
- Chua, Lok Cheng. "Mythopoesis East and West in *The Woman Warrior*." *Approaches to Teaching Kingston's The Woman Warrior*, ed. Shriely Geok-lin Lim. New York: The Modern Language Association of America, 1991. 146-50.
- Cutter, Martha J. "An Impossible Necessity: Translation and the Recreation of Linguistic and Cultural Identities in Contemporary Chinese American Literature." *Criticism* 39.4 (1997): 581-612.
- ドゥルーズ, G., ガタリ, F. 『千のプラトー』宇野邦一他訳 河出書房 1994年。
- Lai, Him Mark, Genny Lim, and Judy Yung, eds. *Island: Poetry and History of Chinese Immigrants on Angel Island 1910-1940*. San Francisco: HOC DOI [History of Chinese Detained on Island] Project, 1980; Seattle: U of Washington P, 1991.
- Kingston, Maxine Hong. *The Woman Warrior: Memoirs of a Girlhood Among Ghosts*. New York: Vintage, 1989 (1975). 『チャイナタウンの女武者』藤本和子訳 晶文社 1978年。
- . "Cultural Mis-readings by American Reviewers." *Critical Essays on Maxine Hong Kingston*, ed. Laura E. Skandera-Trombley. New York: G. K. Hall & Co., 1998. 95-103.
- Lee, Robert G. *Orientalism: Asian American in Popular Culture*. Philadelphia: Temple UP, 1999.
- Li, David Leiwei. *Imagining The Nation: Asian American Literature and Cultural Consent*. Stanford, Cal.: Stanford UP, 1998.

- . "The Production of Chinese American Tradition : Displacing American Orientalist Discourse." *Reading the Literature of Asian America*, ed. Shirley Geok-lim and Amy Ling. Philadelphia : Temple UP, 1992. 319-31.
- Lidoff, Joan. "Autobiography in a Different Voice : *The Woman Warrior* and The Question of Genre." *Approaches to Teaching Kingston's The Woman Warrior*, 1991. 116-120.
- Ma, Sheng-mei. *The Deathly Embrace : Orientalism and Asian American Identity*. Minneapolis : U of Minnesota P., 2000.
- 「木蘭の歌」『漢・魏・六朝時代詩集』『中国古典文学大系』第十六卷 平凡社 1974。369-72。
- 蔡琰 「蘆笛の歌」『漢・魏・六朝時代詩集』35-40。
- 酒井直樹 『日本思想という問題：翻訳と主体』岩波書店 1999。
- 『山海経』 高馬三良訳 平凡社 2000 (1994)。
- Sato, Gayle K. Fujita. "The Woman Warrior as a Search for Ghosts." *Approaches to Teaching Kingston's The Woman Warrior*, 1991. 138-45.
- Spivak, Gayatri Chakravorty. *Outside in the Teaching Machine*. New York : Routledge, 1993.
- Takaki, Ronald. *Strangers from a Different Shore : A History of Asian Americans*. New York : Penguin, 1989.
- VanSpanckeren, Kathryn. "The Asian Literary Background of *The Woman Warrior*." *Approaches to Teaching Kingston's The Woman Warrior*, 1991. 46-51.
- Wong, Sau-ling Cynthia. "Introduction." *Maxine Hong Kingston's The Woman Warrior : A Casebook*, 1999. 3-14.
- . "Autobiography as Guided Chinatown Tour ? Maxine Hong Kingston's *The Woman Warrior* and the Chinese American Autobiography Controversy." *Maxine Hong Kingston's The Woman Warrior : A Casebook*, 1999. 29-53.
- . "Kingston's Handling of Traditional Chinese Sources." *Approaches to Teaching Kingston's The Woman Warrior*, 1991. 26-36.